

# る す ば ん 【低学年４ - ( ２ )】

## - 「こころのノート」を活用した取組み -

( １ ) 主題名 家族が大すき [ ４ - ( ２ ) ]

( ２ ) ねらい 家族の人たちを敬愛し，家族のために自分のできることを進んでしようとする心情を育てる。

( ３ ) 資料名 「るすばん」

( ４ ) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点
導 入	１ これまでの経験を想起する。	ひとりで留守番をしたとき，どんなことを考えましたか。 ・さみしいな。 ・何をしようかな。	資料の主人公に自分を重ねやすくする。
展          開	２ 資料「るすばん」を聞いて，話し合う。          ３ 自分の経験を振り返る。	<p>部屋をきれいにした私は，どんなことを思っているでしょう。 ・お母さんが喜んでくれるといいな。 ・きれいになって気持ちがいいな。</p> <p>洗濯物を汚してしまった時，私はどんなことを思ったでしょう。 ・たいへんなことをしてしまった。 ・きっとしかられるだろうな。</p> <p>帰ってきたお母さんと話した私は，どんな気持ちになっただろう。 ・進んで手伝いをやるといいんだな。 ・お母さんの役に立ってよかった。</p> <p>家族のために何かやったことはありますか。 ・皿洗いを手伝った。 ・掃除機をかけたら，お母さんに褒められた。</p>	<p>状況を把握しやすいように，部分提示をする。 自分ができるところをしてお母さんを喜ばせようとしていることに気付かせる。</p> <p>お母さんのためにしようとしたことを失敗してしまい，困惑していることに気付かせる。</p> <p>お母さんが喜んでくれてうれしかったときの私の気持ちをワークシートに書かせる。</p> <p>これからも家族のために自分のできることを進んでしようとする意欲を高める。</p>
終 末	４ 「こころのノート」を読む。	「こころのノート」を読んでみましょう。	保護者に，児童がしてくれてうれしかった経験を「こころのノート」Ｐ６９に書いてもらっておく。

## るすばん

学校から家に帰ると、つくえの上に手紙が置いてありました。

「みきちゃん、おかえり。お母さんは、きゆうな用じで出かけます。  
おるすばんをおねがいね。お母さんより」

ひとりぼっちかと思いながら、まわりを見ると、へやの中がちらかっています。ぬいだふくもそのままです。

「よし、お母さんをびつくりさせよう。」

わたしは、ちらかったものをかたづけ、ふくをたたみました。へやがきれいになりました。

宿題をしていると、雨がふってきました。外を見ると、せんたくものがほしてあります。

「せんたくものがぬれたら、お母さんがこまるだろうな。とりこまなくちゃ。」

わたしは、せんたくものに手をのばしました。

そのとたん、手がすべって、せんたくものが地面におちてしまいました。すぐに土をはらいましたが、よごれてしまいました。

「どうしよう。」

わたしは、こまってしまいました。

しばらくして、お母さんが帰ってきました。

「ただいま。きちんとおるすばんをしてくれていたかな。」

わたしは、へやをせいりしたこと、せんたくものを落としてよごしてしまったことを、お母さんに話しました。

すると、お母さんは、

「そうだったの。ありがとう。お母さんをたすけようと思ったのね。その気もちが、とてもうれしいわ。このよごれたせんたくものは、いっしょにあらおうね。」

と言いました。

お母さんは、とてもうれしそうでした。

# 活用に生かすための実践報告

「るすばん」

## 1 主題の設定

家族を愛する心を養うためには、児童が、家族一人一人の理解を深め、家族の一員としての自分の立場や役割を知り、家族のために役立つことをしようとする気持ちを育てなければならない。本資料を通して、児童が日ごろ体験している家の手伝いも、家族のために役立っていることを実感することができるであろう。そして、家族を敬愛し、家族のために自分ができることをもっと進んで行おうとする気持ちをはぐくむことができるのではないかと考える。

## 2 指導過程の工夫

ちらかった部屋をきれいにする場面において、服をたたむ動作化を行うことで、自分ができることでお母さんを喜ばせようとしている主人公の気持ちにより迫ることができる考える。

お母さんが帰ってきた場面において、役割演技を取り入れ、たとえ失敗しても、自分ができることを進んでやることの大切さを感じ取ることをとおして、価値に迫ることもできると考える。

## 3 発問の工夫

導入の発問では、自分ひとりですばんをしたときの気持ちを十分引き出し、資料への興味付けをはかりたい。

家族のために何かやったことを振り返る発問では、児童の反応にあわせて「資料の主人公と同じように、お母さんの役にたったなあと思うことはないかな。」といった家族のだれかに対象をしばった発問にしてもよいと考える。

## 4 児童の反応（ワークシート）

- ・お母さんが、がっかりしなかった。役に立ったのかな。
- ・おこられなくてよかった。そうじをしてよかった。うれしいな。
- ・かたづけをいっぱいやってよかったな。
- ・せんとくものを取りこもうとしてよかった。こういうときがまたあれば、がんばるぞ。
- ・お母さんがよろこんでくれてうれしいよ。またこんどやろう。

## 5 実践者からの一言

ほとんどの児童が、家庭で何らかの手伝いを体験しており、資料の主人公に自分を重ね合わせることができた。

また、生活科や休業前の生活指導などと関連付けて授業を行えば、一層効果的であると思われる。

『こころのノート』を読んでいるときの児童の表情がとてもいきいきとしていた。手紙から、自分がしたことを保護者が心から喜び、感謝していることを感じとることができたようである。授業後、ある保護者から「ますます家のことを手伝ってくれるようになりました。」という声を聞くことができた。『こころのノート』が、親と子の心をつなぐ橋渡しの役割をはたすことができたように思う。

（柿浦小学校 奥本雅幸）